

〔共同研究：「建学の精神」の哲学的・神学的再考——「生きること」の意味と「サービス」概念に関連づけて——〕

## 現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察\*

——「世界への愛」とプロセス哲学を視座として——

谷 口 照 三

- I. 緒言——最近の社会問題が示唆すること——
  1. 「食材偽造問題」へのコメント
  2. 「食材偽造問題」の本質
  3. 「食材偽造問題」から「高等教育改革問題」へ
- II. 「世界の愛とプロセス哲学」という視座
  1. 「自由と愛の精神」——桃山学院大学「建学の精神」——
  2. 「世界への愛」の意味
  3. 「世界への愛」とそのプロセス哲学的解釈
- III. 現代社会の問題状況と将来への洞察
  1. 「社会」の解釈——the social と the societal——
  2. 社会における補完関係
  3. 現代社会の特徴と課題——「液状化する近代」, 「リスク社会」, 「内省的近代化」——
- IV. 高等教育改革の問題性と課題としての「目指すべき社会」への洞察
  1. 高等教育改革の動向
  2. 高等教育改革の特性とその問題性
  3. 新たな高等教育改革への基盤としての「目指すべき社会」への洞察
- V. 結言——21世紀における高等教育への洞察——
  1. 教育と文脈
  2. 「世界への愛」の基盤性と高等教育の可能性
  3. 高等教育の課題

\* 本稿は、2012年度桃山学院大学総合研究所共同研究プロジェクト「『建学の精神』の哲学的・神学的再考——『生きること』の意味とサービス概念に関連づけて——」（11共214）の研究成果の一部である。筆者は、本プロジェクトにおいて、本年（2014年）が桃山学院創設130周年、桃山学院大学創設55周年、桃山学院大学キリスト教会創設50周年に当たるため、筆者が所属している日本ホワイトヘッド・プロセス学会の第36回全国大会を本学で引き受け、そのオープニングとして公開シンポジウム「『世界への愛』とプロセス哲学——21世紀を生きるための洞察——」を開催することを提案した。かかるテーマは、「建学の精神」に関連づけ、設定した。筆者は、「世界への愛とプロセス哲学」を文脈とする「21世紀を生きるための一つの洞察」として、『高等教育の可能性と課題』を考える」を提題者として語った。その基礎となった論稿が本稿である。

キーワード：「世界への愛」、プロセス哲学、個人化社会、協働化社会、高等教育改革

## I. 緒言——最近の社会問題が示唆すること——

### 1. 「食材偽造問題」へのコメント

昨年、料理を提供する数社の有名店が食材の偽装で話題になった。その時、実にタイミングがよく、本学、桃山学院大学の広報誌『アンデレクロス』(No.154 2013 Winter)が「食について考える」を特集した。その特集号にビジネス・エシックスの観点からの小文を筆者は依頼された。かかる小文、「『食材』の偽装の問題」を引用することから、本稿を始めたいと思う。それは、最近同様の問題が報道されており、この問題は世間で思われている以上に根の深いものだと、またある種の構造的問題がその根底にあると、推察せざるを得ない、との思いがあるからである。以下が、筆者のこの問題に関するコメントである。

「食べることは、他の生命の『略奪』である。それ故に、『生かされている』ことに感謝する必要がある。ここに、道徳的、倫理的な基盤がある。今回の『食材偽装』は、この共通基盤への裏切りであり、冒瀆である。

それはなぜ起きたのか。組織による『費用の削減圧力』が働いていなかったかどうか。また、『プロフェッショナル意識』が上滑りし、『メニューと異なる食材でも顧客にはわからない』、という意識がなかったかどうか。よく考えてみる必要がある。『アマチュア』は、本来『愛する人』である。『食』に係わる『プロフェッショナル』は、『食』を『愛する人』でもあり、上述の『共通基盤』の上に立つ人でもある。真の『プロフェッショナル』であれば、『費用の削減圧力』との間で、葛藤を抱え、悪戦苦闘したであろう。だが、『プロ』と『素人であるアマ』を区別し、『わからないであろう』と『費用の削減圧力』との折り合いを付けた。これが今回の『偽装』事件の真相であろう。

事態の改善には、まず何よりも、『組織の圧力』を排除し、『真のプロフェッショナルとは何か』、および『我々の使命は何か』を巡る、現場の人々の自由な議論が必要であろう。そして、経営者は、その結果を核として組織自体の『使命』を再構築し、内外に表明し、共感を呼び込むように創造的なリーダーシップを発揮する必要がある。」

### 2. 「食材偽造問題」の本質

周知のように、「生きること」は、食料を必要としており、それは、他の生命の『略奪』であることは、ホワイトヘッドが述べたことである<sup>1)</sup>。彼は、人間やいわゆる社会を「生きている社会」と言い、それらはいわゆる環境との相互作用を必要としており、それは「略奪という形態をとる」と明記している。それは、我々が「生きること」において避けることができない負の側面である。ホワイトヘッドによれば、それ故に、「生命と共に道徳が重大に

1) Cf., Alfred North A. N. Whitehead, *Process and Reality: An Essay in Cosmology*, Macmillan, 1929. Fee Press Paperback, 1969, pp.124-125. 平林康之訳『過程と実在——コスモロジーへの試論——1』みすず書房、1981年、156頁。参照。

な」り、「その略奪は正当化を必要としている」。かかる「道徳」は、「生かされていること」への覚醒からくる「感謝」や「配慮」の必要性を浮き彫りにし、また、「正当化」は「生命」を維持し、「よりよく生きていく」ことへとわれわれを誘うことになろう。それらは、「相互作用」による「新しい所産」であり、さらに「新たな相互作用」に「新たな意味、意義」を付加することになる。

ホワイトヘッドの言う「社会」は、種々の要素の複合的な相互関係の、過程、プロセスを媒介とした構造と機能のシステムを示す一般的概念である。しかし、本稿では、混乱を避けるために、「社会」をこの一般的概念を代表する具体的概念としての、いわゆる「人間社会」と言われる場合の「社会」として捉えておこう。我々は、「生きる」ために「社会」を必要とするし、また「社会」のなかに「生きる」。そして、「よりよく生きる」ために「補完的機能」を果たす協働的（cooperative）な活動体としての専門的な諸組織や団体が形成され、「社会」は複雑に発展してきた。我々は、現在、極めて複雑な相互関係のなかで生きている。とするならば、我々は、補完機能を果たす者、組織、団体も含め、かかる複雑な相互関係のなかに、先の「略奪の必然性」、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」を位置づけ、それらに応答していく必要があることは、言うまでもない。食事をする人は、「生かされていること」に対して、その食材となった「他の生命」のみならず、「食べること」を可能としてくれるあらゆる補完者（組織や団体も含む）に「配慮」する必要があるだろう。また、すべての補完者は、「略奪を補完している」のであるから、このことと無縁であるはずがない。あらゆる「仕事」は、かかる補完関係に組み込まれたものであるが故に、かかる文脈に関連づけ、意味づける必要がありそうである。

### 3. 「食材偽造問題」から「高等教育改革問題」へ

しかし、このような現代における複雑な相互関係、補完関係においては、その複雑さ故に、また現代社会の特徴からくる「圧力」から、「略奪」の必然性、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」は、著しく見えにくくなっている、と考えられる。たびたび浮上する「食材偽造問題」は、まさにそのことの表れだと考えられよう。そこには、複雑な相互関係、補完関係を理解するための枠組みが、それを筆者はプロセス哲学と言いたいのであるが、欠落している、と考えざるを得ない。また、それ故に、「略奪」の必然性、「生命と道徳の重大性」、「正当化の不可避性」への眼差しであると思われる「世界への愛」が極めて脆弱であることを読み取ることも可能であろう。この傾向は、この問題に限ったことではない。それは、あらゆる問題に係っているように思う。しかし、とりわけ筆者が現在危惧しているのは、我々の一つの、また重要な「世界」に係るが、高等教育改革の問題である。

本稿では、現在進行中の改革においては、それを方向づけるはずの現代社会ないし世界の理解が表層的で、「食材偽造問題」と同様に、複雑な相互関係や補完関係を解釈するプロセス哲学的視座が欠落し、またそれ故に「改革」の内容を性格づけるためには欠かせない眼差

しである「世界への愛」が脆弱である点を指摘したい。その上で、また、「食材偽造問題」の「改善」に関して述べた内容と同様な性質に沿った洞察をもって、21世紀の高等教育の可能性と課題を考えてみたいと思う。

## Ⅱ. 「世界の愛とプロセス哲学」という視座

### 1. 「自由と愛の精神」——桃山学院大学「建学の精神」——

「世界への愛」の着想は、直接的には中山元著『ハンナ・アレント〈世界への愛〉——その思想と生涯——』（新曜社、2013年）に出合ったことに由来する。しかし、その土壌は本学、桃山学院大学の「建学の精神」にある。本学は、英国国教会系のミッションスクールとしてクリスチャン・ネーム St. Andrew's University を戴いており、その「建学の精神」ならびに理念的教育目標は、以下の通りである。「キリスト教精神に基づいて人格を陶冶し、豊かな教養を体得させ、深い専門学術を研究、教授することにより、世界の市民として広く国際的に活躍しうる人材を養成し、国際社会、世界文化の発展に寄与することを目的とする」。クリスチャン・ネームに表わされている聖アンデレは、イエス・キリストの最初の弟子であった一人である。桃山学院の学院章は彼の象徴であり、「アンデレ・クロス」(X型の十字架、通常「逆さ十字」)をアンデレがキリストに出合った時キリストからかけられた言葉「SEQUIMINI ME」(セクイミニ メ、我に従え)が支えるように、デザインされている。アンデレは、厳しい迫害を受けながらも、イエスの教えを守り「自由と愛の精神」を貫いた人であった。したがって、本学において、「キリスト教精神」は、「自由と愛の精神」として位置づけられている<sup>2)</sup>。

筆者は、かつてこの「建学の精神」を『『世界の市民』パラダイムの可能性』と題し、その解釈と応用について論究したことがある<sup>3)</sup>。「自由と愛」の関係、また特に「愛」の意味を掴むために参考になったのは、トム・モリスが新約聖書・マタイによる福音書にある「山上の説教」の一節である、いわゆるゴールデン・ルール「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」を「自分が相手の立場にいると仮定して、その立場でもらいたいと自分が思うようなやり方で、相手に接すべし」と正しく解釈すれば、「私たちの想像力を刺激する」、と述べている点であった<sup>4)</sup>。このように解釈された「接し方」を実現するには、「まさに相手に応答しうるように共感を生むような想像力、イメージーションを発揮することが必要であり、「疑似体験というより、相手に対する思いやりの気持ちを持ち、相手の『立場』を洞察、フォーサイトする能力が必要となってくる」、と思われる<sup>5)</sup>。

2) <http://www.andrew.ac.jp/info/ideology.html> を参照されたい。

3) 谷口照三稿『『世界の市民』パラダイムの可能性——桃山学院大学の『建学の精神』の解釈と応用——』『キリスト教論集』(桃山学院大学)第42号、2006年3月。

4) Cf., Tom Morris, *If Aristotle Ran General Motors: The New Soul of Business*, Henry Holt, 1997, pp. 146-148. トム・モリス著、沢崎冬日訳『アリストテレスがGMを経営したら——新しいビジネス・マインドの探究——』ダイヤモンド社、1998年、166-168頁。参照。

5) 谷口照三、前掲稿。

「自由と愛」の「愛」は、「応答すること」の可能性を拓く「基盤的能力」と言えるのではなからうか。それは、「配慮」や「気遣い」と捉えてよい。新約聖書のうちの四つの福音書を岩手県大船渡の言葉「ケセン語」で翻訳した山浦玄嗣医師は、「愛」を「大切にする、大事にする」と訳している<sup>6)</sup>。また、エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) は、愛の能動的性質を示す要素として「配慮」、「責任」、「尊重」、「理解 (知)」を挙げている<sup>7)</sup>。それは、「愛」の一面である「自己本位性」を排除する試みであろう。山浦の意図もそこにある。

かかる解釈は、自由の位置づけを明瞭にする効果もあるように思われる。フロムの言葉を借りれば<sup>8)</sup>、「自分が独立していなければ」、「自由であってはじめて人を尊重できる」のであり、「愛は自由の子」であり、「けっして支配の子ではない」のである。また、ホワイトヘッドは、「自由の本質は、目的の実行可能性 (the practicability of purpose.) である」、と言っている<sup>9)</sup>。これは、フロムが「愛の能動的性質」の一つ、「責任」に重なるであろう。「責任」(responsibility) は、また後に触れることになるが、「応答可能性」と訳すべきだと思う。「自由には責任が伴う」とは、よく言われる一節であるが、むしろ「責任」を「応答可能性」と捉えた上で、「応答可能性」の必要充分条件として「自由」を位置づける必要があるのではなからうか。ただ単に「自由には責任が伴う」とするならば、それは「自由」を何等かによって制限する可能性を排除できないであろう。

## 2. 「世界への愛」の意味

以上のような「愛」の捉え方は、先ほどのいわゆるゴールデン・ルールを含め、新約聖書「マタイによる福音書」の以下のようなイエスの言葉<sup>10)</sup>を「世界への愛」の下に解釈することを助けてくれる。それらの最初の言葉は、あの有名な、しかも山村医師がこれは「愛」の対象にはなにくいという理由から「大切にする」の翻訳の妥当性を主張する契機となった言葉、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」、である。二つ目と三番目は、「どの掟が最も重要か」という問いに関する言葉である。第一の掟は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主 (しゅ) を愛しなさい」であり、第二の掟が「隣人を自分のように愛しなさい」である。これらの言葉を基礎に、現代の文脈を考慮するならば、次のように言うことができよう。「愛」、つまり「配慮」・「気遣い」をもってよく

6) 山浦玄嗣著『ふるさとのイエス——ケセン語訳聖書から見えてきたもの——』イー・ピックス、2003年、参照。今年 (2014年) の3月、本学の共同研究『「建学の精神」の哲学的・神学的再考——『生きること』の意味とサービス概念に関連づけて——』のヒヤリングで東日本大震災・津波の被災地である岩手県の大船渡を訪問した時、山浦玄嗣医師とイー・ピックスの熊谷雅也社長にお会いし、対話できたことは、「世界への愛」への着想をより確実なものにした。この場を借り、御礼を申したい。

7) エーリッヒ・フロム著、鈴木晶訳『新訳版 愛するということ』紀伊国屋書店、1991年、48頁、95頁、参照。

8) 上掲書、51頁。

9) Whitehead, *The Adventures of Ideas*, Macmillan, 1933. A Free Press Paperback, 1967, p.66. ホワイトヘッド著作集第12巻、山本誠作・菱木政暗共訳『観念の冒険』松頼社、1982年、90頁。

10) NKJ/新共同訳『新約聖書』、マタイによる福音書 5-44, 22-37, 22-39。

「理解」し、そのことを通して「尊重」し、そして「応答可能性」を拓いていく、その対象とは、われわれが生きていく、いわゆる環境世界である大地や他の生命などを含めた広い意味での「他者」と考えられよう。

ここで、急いで、留意すべき一つの点を述べておかなければならない。かかる「『配慮』・『気遣い』をもってよく『理解』しそのことを通して『尊重』し、そして『応答可能性』を拓いていく」、という意識的な行為は、当然「内省化」(reflexivization)のトーンを伴い自己を拓いていくことでもあるとするならば、「世界」は、自己自身を含むと考える方が合理的であろう。自己自身を大事に、大切にしなければ、他者を大事に、大切にすることはできない<sup>11)</sup>。

しかし、かかる「世界」は、「愛」、「配慮」などの単なる「対象」に止まるものでないことは、言うまでもない。この点の説明を補足する必要があるだろう。それは、ハンナ・アレント(Hannah Arendt)の諸説によることが適切であると思うが、今回は直接取り上げる余裕がないこともあり、アレントなどを参考に、このことに関して巧みに説明を展開している森一郎の言説に触れることに、留めることにしたい。森は、「世界」を以下のように説明する<sup>12)</sup>。「『世界』とは、世界内存在するこの私の住み処であると同時に、作り出され使い続けられる物たちの事物世界であり、かつ死すべき生れ出する者たちの共同世界である。事物世界と共同世界を織り込んで成り立っている、この私の世界は、私が生れ落ちるずっと前から、この地上に存在し続けてきたし、しばしの滞在ののち私が立ち去っても、しぶとく存立し続けるであろう。命を超えて存続する地平全体、それが世界なのである」。そして森は、その「世界」と「世代間倫理」を結びつけ、「世界への愛」の意味をクリアーにしている。「そして、この連繫に芽生える、事象性を含んだ世代間倫理を著わす言葉こそ、『世界への愛』にはほかならない」。さらに彼は、「世界への愛」という言葉が醸し出すある種の危険性を想起するように、手堅く説明している。「死すべき者たちが、いのちを超えたものに思いを寄せ、それを大切にすることは、滅私奉公でもなく悪しき物象化でもなく、世界内存在する自己自身をその本来性において具現させることである。それは、自己への愛であると同時に、世界への愛である」。

### 3. 「世界への愛」とそのプロセス哲学的解釈

ここで、緒言で触れた「人間」と環境の交互作用における「略奪」の問題に、立ち返ることにしたい。我々は、生きるために、「食料」を取り入れ、「生命」を繋ぐことによって、常に『新しさ』を創出している。しかし、我々は、そこに止まることなく、「道徳」や「正当化」の必要性に対しての応答として、「よりよく生きること」を志向しなければならない。

11) フロム、上掲書、92-100頁、参照。

12) 森一郎著『死を超えるもの——3/11以後の哲学の可能性——』東京大学出版会、2013年、64-65頁、参照。

それは、単なる生命の維持に付加された「意味の刷り込み」であり、かかる交互作用において「世界」が形成される、と言ってよいのではなかろうか。

ホワイトヘッドは、「生きること」(to live) から「よく生きること」(to live well), さらに「よりよく生きること」(to live better) の三重の衝動を生きることを「生命の技巧」(art of life) と呼び、「世界の形成」に係る「環境への働きかけ」を説明している<sup>13)</sup>。「三重の衝動を生きること」とは、三重の衝動のサイクルと、それがスパイラル・アップ (spiral up) したプロセス、つまり上向きの循環過程を、「生命の技巧」を契機として、形成することである。「生命の技巧」は、まさに「世界」への「意味の刷り込み」、と言える。それは、他者との相互内在的な「意味の刷り込み」の歴史である過去への省察と未来に対する洞察により、「いま・ここ」である現在をいかに生きるか、という決断に係ることである。ホワイトヘッドは、「生命の技巧の増進」を「理性の機能」に求め、「<理性>とは、事実においてではなく、想像力において認められる目標達成に向けての強い衝動をみずから指揮し、さらにそれを批判するところの、経験にふくまれる要因である」と定義している<sup>14)</sup>。ここでの「理性」は、一般に理解されている意味とは異なることに、注意を要する。むしろ、混乱を避けるために、筆者は、後に高等教育のところで触れることになるが、それを「英知」(wisdom) に置き換えた方がよいのではないかと考えている。それを是とした場合、「英知」を伴った「生命の技巧」は、「生きることの上向きの循環過程」の「舵取り」、つまりライフ・ガバナンス (life governance) である、と言うことが出来よう。

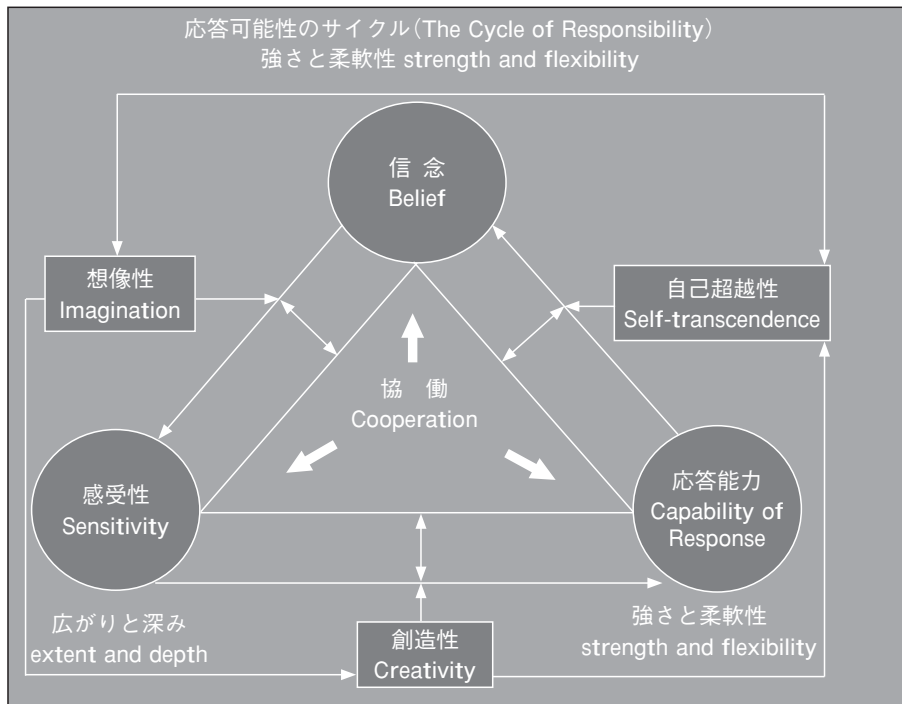
「世界の愛」の具現化プロセスとしての「生きることの上向きの循環過程」は、すでに指摘しているように、「応答可能性を拓く」プロセスである。このような意味での「応答可能性」は、いわゆる責任 (responsibility) 概念を一般化したもの、と言えよう。そのサイクルとスパイラル・アップしたプロセスを図式化したものが、第一図と第二図である。これらは、種々の文献によるところもあるが、基本的にホワイトヘッドのプロセス哲学とヴィクトール・E・フランクル (Viktor E. Frankl) の所説を参考に作り上げたものである。まず、「応答可能性」は、広い意味での「信念」(belief) から「感受性」(sensitivity) へ、「感受性」から「応答能力」(capability of response) へ、そして「応答能力」から「信念」への3つのミクロ・プロセスから構成されている。前2者は、フランクルが「生きる意味」の探究において表現した言葉を借用し、「想像的に何かを感受することによって意味を満たす」プロセス、および「創造的に何かを形にすることによって意味を満たす」プロセスとした<sup>15)</sup>。最後の微視的プロセスは、ホワイトヘッドが主体はアクチュアル・エンティティ (actual entity) として世界から限定されながらも自らを限定する自己創造的の被造物 (self-creating creature)

13) Cf., Whitehead, *The Function of Reason*, Princeton University Press, 1929. P. 8. ホワイトヘッド著作集第8巻『理性の機能・象徴作用』, 11-12頁, 参照。

14) Ditto, 上掲訳書, 12頁。

15) ヴィクトール・E・フランクル著, 諸富祥彦訳『<生きる意味>を求めて』春秋社, 1999年, 119-120頁, 参照。

第1図 Responsibility の解釈



出典：谷口照三著『戦後日本の企業社会と経営思想——CSR 経営を語る一つの文脈——』（文真堂，2007年），「私益の追求と公益のバランス——経営者の公益活動を考察する——」，間瀬啓允編『公益学を学ぶ人のために』（世界思想社，2008年）で使用した図を若干修正し，使用。

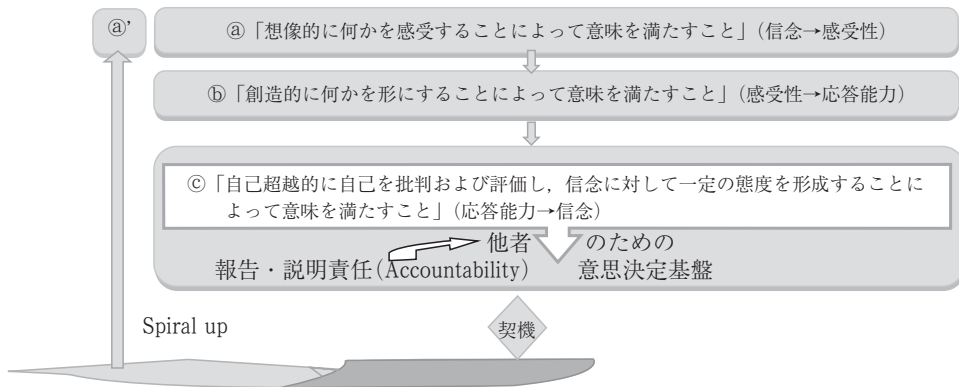
であると同時に，常に自己を超え出る自己超越的主体（subject-superject）であるとの見解に依拠し表現したもので，「自己超越的に自己を批判および評価し，信念に対して一定の態度を形成することによって意味を満たす」プロセスである<sup>16)</sup>。このようなサイクルは，幅広い「協働」を基盤とし，はじめて可能である。生きていく為には「環境への働きかけ」を必要としているけれども，我々は脆弱性（vulnerability）や能力の限界から完全に自由ではあり得ない。そこに，「協働」の必要性が出てくる<sup>17)</sup>。応答可能性のサイクルのあらゆる局面に，「協働」の，また「(創造的) 想像性」(imagination)，「(想像的) 創造性」(creativity) の関与がある，と考えなければならない。応答可能性のスパイラル・アップしたマクロ・プロセスへの契機は，「自己超越性」(self-transcendence) である。この具体的な働きには，アカウンタビリティ，いわゆる説明責任 (accountability) を含む。なぜならば，応答可能性を拓く，生きるプロセスは，これまで見てきましたように，自己と他者との相互浸透性から成り立っているが故に，自己の立場をオープンにし，他者に対して「批判可能性」を提示しなけ

16) Cf., Whitehead, *Process and Reality*, p.34. 前掲訳書，42頁，参照。谷口照三稿「『世界の市民』パラダイムの可能性」。

17) 詳しくは，以下の拙稿を参照されたい。谷口照三稿「『生きること』とその意味の探究への一省察——ヴァルネラビリティとサブシディアリティ概念を媒介に——」『桃山学院大学キリスト教論集』第49号，2014年3月。



第2図 Responsible Spiral Process



出典：谷口照三稿『「責任経営の学」としての経営学への視座——経営学の組織倫理的転回——』『環太平洋圏経営研究』（桃山学院大学）第10号，2009年11月。第1図「応答可能性（責任）の考え方」を修正。

ればならない。また、有効な協働を確保するためにも、それは必要となろう。また、それは、ライフ・ガバナンスである「英知」を伴った「生命の技巧」を培う「経験」でもある。「生命の技巧」は、「応答可能性」のサイクルのあらゆる局面に働く必要があるが、とりわけスパイラル・アップの契機としてのそれが重要であろう。

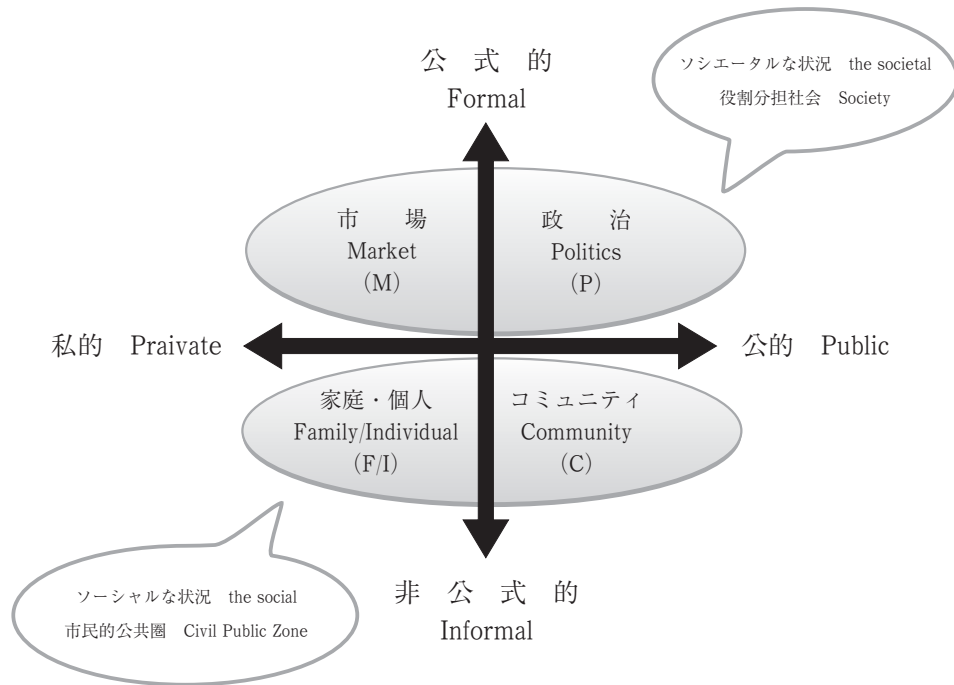
### III. 現代社会の問題状況と将来への洞察

#### 1. 「社会」の解釈——the social と the societal——

このような各自の「応答可能性を拓くプロセス」をサポートする各種の協働関係の進展が、いわゆる社会の発展である、といってよい。かかる協働関係は、非公式的なパートナーシップから公式的な諸制度の中の専門的な諸組織や団体に及ぶであろう。このような人々が「生きていく」場や協働状況は、私的と公的、また非公式的と公式的、という対比的な二種類の基準を基にするならば、第3図のように、「家庭・個人」(F/I)、「地域社会」(C)、「市場」(M)、「政治」(G)の4種類に分類出来る。ここでは、とりわけ、F/IとCの前二者の協働関係、およびMとGの後二者の協働関係の対比に注目したい。それらは、いわゆる個人も含んだ「社会なるもの」を意味している。前者を「ソーシャルな状況」(the social)、後者を「ソシエタルな状況」(the societal)と呼び、区別しておきたいと思う。

『「ソーシャルな状況」』とは、非公式的で、人格的な相互関係であり、人々が生きていく原初的な『他者と共に在る』[(being with others)] 社会状況である。しかし、……真に『他者と共に在る』には、相互に人々は『他者のために在る』[(being for others)] ことが必要であろう。この点の理解には、哲学者今道友信が『我思うゆえに我あり』(Cogito, ergo sum: コギト・エルゴ・スム)に倣い、『私は(誰かに)応答している、ゆえに私は存在する』(Respondeo, ergo sum: レスポンデオー・エルゴ・スム)と言っていることも参考になろう。『ソシエタルな状況』とは、公式的な役割関係、契約関係である。それは、社会学者ジグ

第3図 ソーシャルな状況とソシエタルな状況

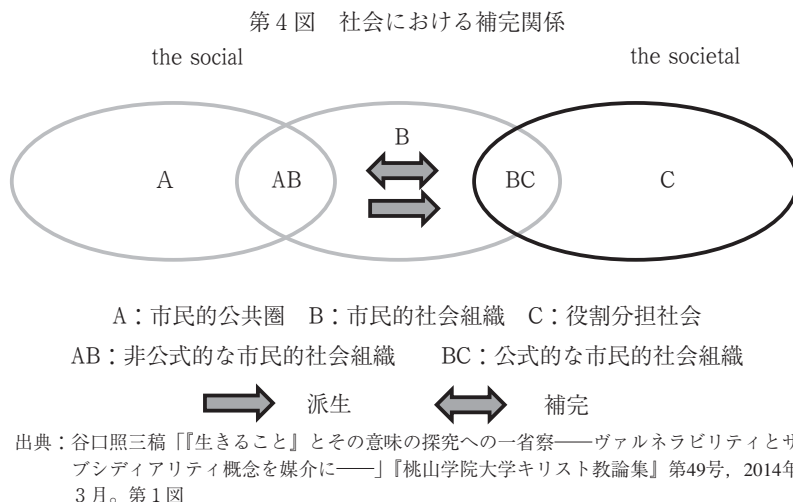


ムント・バウマン (Zygmunt Bauman) に言わせれば、『訓練や執行の超個人的機関 (supra-individual agencies of training and enforcement)』によって作られる状況ということになる<sup>18)</sup>。

## 2. 社会における補完関係

協働関係の「ソーシャルな状況」と「ソシエタルな状況」をより具体的に示すならば、前者を「市民的公共圏」(Civil Public Zone)、後者を「役割分担社会」(Society)と表現することが出来よう。ここで注意すべきは、前者から後者が派生すること、また基本的には後者が前者を補完するという点である。前者と後者を媒介することで注目されているのは、中間組織である「市民的社会組織」(Civil Society Organization; CSO)である。それは、「非営利組織」(Non-Profit Organization; NPO)や「非政府組織」(Non-Governmental Organization; NGO)などをその本質的な性質に配慮して表現したものである。このような、いわゆる社会の発展関係に焦点を当てた図が、第4図である。第4図の「 $\longleftrightarrow$ 」は、相互補完関係を示すが、基本的な関係は『市民的公共圏』を『役割分担社会』が補完することである。しかし、……『公式的な市民的社会組織』の媒介機能は相互補完関係を強化する。『市民的公共圏』からの『役割分担社会』への補完は、そのみでなく、前者に属する人々が後者を構成する

18) 上掲稿。今道友信著『エコエティカ生圏倫理学入門』講談社学術文庫、1990年、104頁、参照。Cf., Zygmunt Bauman, *Modernity and the Holocaust*, Polity Press, 1989, p. 179. ジークムント・バウマン著、森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店、2006年、233頁、参照。



種々の協働システムや組織の構成メンバーとして特定の役割を担うことによって果たされる。ここに、『補完関係のパラドックス』が存在する<sup>19)</sup>。

かかる点が、社会、特に現代社会を巡る根本的な問題であると同時にデリケートな問題でもある。さらに、それと共に視野に入れておくべき重要な点は、「政治」や「市場」が、つまり「役割分担社会」が真に、また十分に「家族・個人」および「コミュニティ」、つまり「市民的公共圏」を補完し得ているかどうか、という問題であろう。現実には、「市場」は私的な性質であるにもかかわらず「政治」と共に「公的な領域」として位置づけられ、かかる性質をもつ「役割分担社会」を補完するのが「家族・個人」および「コミュニティ」などの「市民的公共圏」や「市民的社会組織」である、と逆転した補完関係が出来上がっているのではないかと思わざるを得ないところがある。それは、「役割分担社会」のなかに「市民的公共圏」や「市民的社会組織」がからめ捕られ、「社会」があたかも「役割分担社会」そのものと認識するところから来ているのではないであろうか。

### 3. 現代社会の特徴と課題——「液状化する近代」、「リスク社会」、「内省的近代化」——

これらの問題をさらに複雑にしているのは、現代社会の特徴、高度科学技術の進展、工業化の高度な進展、グローバリゼーション (globalization)、大競争 (mega-competition)、地球環境問題などに関連して表現されている「液状化する近代」(liquid modernity)、「リスク社会」(risk society)、「内省的近代化」(reflexive modernization) という特徴である。

「液状化する近代」は、ジグムント・バウマンが言う社会の中心的活動が工業化から情報化ないし知識化を伴った高度工業化へと進展する中で、「創造的破壊」を合言葉とし、空間から時間への価値の移転が劇的に起こってくる社会であり、同時に「自由が万人のものとな」

19) 谷口照三，上掲稿。

り、責任が「社会」や「組織」から「個人」へと移転される社会でもある<sup>20)</sup>。ここでは、「生きる人々の行為が、一定の習慣やルーチンへと[あたかも液体が個体へと]凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまう」<sup>21)</sup>。このような「自由な個人からなる『流動的近代』社会には、秩序からはみでる者を処罰する、残忍なビッグ・ブラザーへの恐怖心は存在しな」くなりがちであるが、「しかし同時に、成すべきこと、持つべきものの選択のさい、それを邪魔する弱い者いじめから、幼い弟をまもってくれる、やさしく、思いやりのある、助けにも頼りにもなる年上の兄貴分も、新しい社会はもたない」し、「すべては個人にまかされ」、「能力をみつけ、できるところまで発展させ、能力が最高に発揮できる目的を探し出す仕事は個人にまかされる」ことになる<sup>22)</sup>。

また、現代社会を「リスク社会」と特徴づけたのは、社会学者ウルリヒ・ベック (Ulrich Beck) である。彼は、工業化と高度工業化がもたらす自然環境や健康への被害、および将来的なそれらの可能性が埋め込まれた社会を「リスク社会」と呼ぶ<sup>23)</sup>。「リスク社会」が「液状化する現代」にも影響を与える場合もあるであろう。しかし、それよりも「液状化する現代」そのものがリスク化し、「リスク社会」を加速する危険性が大きい。それ故に、われわれは、「手に負えない状況に陥る」前に、それらの必然性と共にその問題性をしっかりと受け止め、改善の方向をとれるように、思考と行動を導く「内省的近代化 (reflexive modernization)」に向けて歩む必要があるのではなかろうか<sup>24)</sup>。

「液状化する現代」は、自由な選択が権利でもあり、また義務でもあり、その結果に対する自己責任原則が強調されることにより、「個人化社会」へと繋がってくる。そこでの個人の生活は、「液状化する生活」(liquid life) となり、それは、「不安定な生活であり、たえまない不確実性の中で生きること」になると、予想される<sup>25)</sup>。それ故に、すでに述べように、それ自体がリスク化すであろう。「リスク社会」は、工業化、高度工業化の進展によるものに加え、このような「個人化社会」のそれも加わることから、かえって真に強力な「協働化社会」を必要とせざるを得ない。したがって、個々人のボランティアや中間組織である「市民的社会組織」にとどまる「協働革命」のみでは、「内省的現代化」の深化は望めないであ

20) Cf., Zygmunt Bauman, *Liquid Modernity*, Polity Press, 2000. ジーグムント・バウマン著、森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会——』大月書店、2001年、参照。

21) Bauman, *Liquid Life*, Polity Press, 2005, p.1. ジグムント・バウマン著、長谷川啓介訳『リキッド・ライフ——現代における生の諸相——』大月書店、2008年、7頁。

22) Cf., Bauman, *Liquid Modernity*, pp.61-62. 訳書、80頁、参照。

23) Cf., Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag, 1986. ウルリヒ・ベック著、東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道——』法政大学出版局、1998年、参照。Cf., Beck, *World Risk Society*, Polity Press, 1999. ウルリヒ・ベック著、山本啓訳『世界リスク社会』法政大学出版会、2014年、参照。Cf., Beck, *World at Risk*, Polity Press, 2009.

24) ベック、『危険社会』、13-14頁、317-331頁、参照。Cf., Beck, *World Risk Society*, pp.79-81. ベック、『世界リスク社会』、135-139頁、参照。Cf., Beck, *World at Risk*, Cf., Beck, *World at Risk*, p.55, pp.119-120.

25) Bauman, *Liquid Life*. P.2. 上掲訳書、8頁。

ろう。そのためには、本格的な社会における「補完関係」の再構築を志向していく必要がある。

#### Ⅳ. 高等教育改革の問題性と課題としての「目指すべき社会」への洞察

##### 1. 高等教育改革の動向

さて、今日の、と言ってもすでにかなりの、しかも「失われた……年」と言う文脈の中で、それと共に進められてきている高等教育の改革は、上述した背景への「応答可能性を拓く」、ということに間違いはない。しかし、問題は、その背景となる現代社会の特徴のどこを見ているか、またそのことと人々が生きる「応答可能性を拓くプロセス」をどのように位置づけているか、と真摯に問い続けているか、あるいは問い続けることができるかどうか、ではないであろうか。再度述べなければならぬが、筆者には、確信をもって、そのことを是とすることができないのである。

高等教育改革<sup>26)</sup>のエポックは、何と言っても、1991年の「大学設置基準の大綱化」であろう。それは、「戦後教育の総決算」と謳われた1984年の臨時教育審議会（中曽根首相の私的諮問機関）第二次答申における「大学教育の充実と個性化のための大学設置基準の大綱化・簡素化」を受けて行われた。そこでの中心的論点は、「一般教育と専門教育の区分の廃止」、「一般教育の科目区分の廃止」、「カリキュラムの自由化」である。それは、我々にとって、極めて衝撃的なことで、かつある一種の高揚感をもって当時受け止めたものである。我々大学に勤めるものにとって、大学教育の「自由化」と「個性化」は、高等教育はそれでこそ生かされる、という意味で大変刺激的で、魅力的であった。しかしながら、その結果は、もちろん我々の力量不足を認めざるを得ないが、期待外れであったと言えよう。それは、一般教育課程、教養部の改組転換、および「専門教育の事実上の一般教育化」を通じ、「専門教育の空洞化」<sup>27)</sup>や「大学の中核をなす教養の批判的な力そのものの解体」<sup>28)</sup>が進行していった、と言っても過言でなからう。

しかし、それらは、1990年代以降、日本経済社会の構造変動や不況の広がり、また経済・情報・知識のグローバル化の急激な進展による知識経済化の状況の中で、如何に日本の、また日本の企業の国際競争力をつけていくかが焦点化されたことと、無関係ではなく、連動しているように思える。そこでは、まさに、日本の、また日本の企業の「生き残り」、「生きる力」が焦眉の急となったのである。そのために、科学技術研究も含めた高度な専門職業能力は大学院が担い、そして学部教育では「学士力」と表した「新しい教養」が教育課題として位置

26) 高等教育改革に関する答申は、以下を参照。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/index.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/index.html)

27) 岩崎稔・大内裕和・西山雄二稿「討論 大学の未来のために」『現代思想』（特集 大学の未来）第37巻第14号，2009年11月，青土社。大内裕和の発言。

28) 上掲稿，西山雄二の発言。

づけられることになった。「学士力」としては、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、「自立した市民や職業人として必要な能力」として、専門分野を横断し、汎用性をもつものとして、「知識・理解」、「汎用的能力」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」が挙げられている。これらは、2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、以下のようにより説明的に展開されている。第一点、「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力」、第二点、「人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担い、倫理的、社会的能力」、第三点、「総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力」、第四点、「想定外の困難に際して適格な判断をするための基盤となる教養、知識、経験」。かかる答申では、「今、重要なのは、」かかる四点を育てることである、と力説している。そのこと自体は、幅広く、包括的で、申し分ないように思える。と言うより、かなり高度なことを学生に要請しているように思う。むしろこれらは、今の経営者や職業人に対して求めるべきなのではないだろうか。いずれにせよ、「学士力」といわれるものを高等教育に期待しなければならないのは、上述した今日の情勢の中では企業の内部でかかる人材養成は負担が大きくなり、かつそのことがリスク化し、企業から「生きる力」を削ぐことになるからではないだろうか。

## 2. 高等教育改革の特性とその問題性

それはともかく、かかる「新しい教養」、「新しい能力」は、「次代を生き抜く力を学生が確実に身に付けるための大学教育改革が、学生の人生と我が国の未来を確固たるものにするための根幹であり、国を挙げてこれを進める必要があるという認識に立って、まず学士課程教育の質的転換に焦点を当て」<sup>29)</sup>るための「戦略的要因」であった、と考えることができる。かかる「質的転換」とは、「社会に役立つ」ことへの「転換」であることは間違いないであろう。問題は、そこで「社会」は何を意味しているか、である。明らかに、それは、すでに言及した「the societal」な「役割分担社会」での「政治」が「市場」をサポートするいわば「経済社会」、あるいは答申にたびたび出てくる「社会経済構造」を意味していると思われる。その立場に立つならば、「役立つ」とは「競争上の有利さ」をもつことを同時に意味する。そのためにも、「社会」として「役立つ教育」のために「経済的基盤」を用意する必要がある。しかしながら、その「用意」は、「競争上」の観点からも「効率的に」実行することが求められよう。そこで、経営戦略的手法、つまり限られた資源を効率的に使用するための「選択と集中」が援用される。それを実行可能にするために、各大学の「建学精神」の

29) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」、平成24年8月28日。

下に、「ミッション・ステートメント」,「アドミッション・ポリシー」,「カリキュラム・ポリシー」,「ディプロマ・ポリシー」を作成し,それに基づいた教育実践を「自己点検・評価」し,また第三者評価も加味した仕組みが作られつつ。これが,「質保障」を担保する制度的側面である。今一つのその担保は,教育方法の側面である。大学教育改革に関して,最も注目を浴びている「アクティブ・ラーニング」(Active Learning)<sup>30)</sup>と「プロブレム・ベースド・ラーニング」(Problem-Based Learning)<sup>31)</sup>がそれである。「質保障」の二つの側面それぞれは,おそらく必要であろう。問題は,どのような文脈で,またどのような内容で行われるか,である。特定の文脈や内容のみでは,またその説明が省略される場合,むしろ弊害の発生可能性が広がるかもしれない。答申での「新しい教養」や「新しい能力」は,そもそも「汎用的」

30) 本学経営学部では,「アクティブ・ラーニング」のほぼ全科目における実践を推奨している。そのため,「アクティブ・ラーニング」を広く,深く捉えようとしている。以下の図を参照されたい。

図 アクティブ・ラーニングの捉え方

グループ			
実 践 知	＜現実の問題を解決する＞	＜関係の中で自分の役割を果たす＞	理 論 知
	<p>「チャレンジ型」</p> グループ単位での調査・分析・提案, グループ単位での企画・実施, 長期的な経営サポート	<p>「コミュニケーション型」</p> 文殊シート, ゲーム形式, グループワーク ディスカッション エルダーシステム ロールプレイング 企業データ分析 (チーム)	
	＜現実を体験し実感する＞	＜知識をふりかえる＞	
	<p>「気づき型」</p> インターンシップ 企業訪問・インタビュー 現場見学	<p>「知識定着型」</p> 輪読, 音読, 視覚教材 授業であてる, 挙手させる, カード利用, ミニペーパー, クイズ・ゲーム形式, 小テスト, 計算問題, ミニレポート, ケーススタディ分析	
個人			

出典：牧野丹奈子桃山学院大学経営学部長作成「2014年3月10日経営学部研修教授会資料より抜粋。

31) この点については,2013年8月17日(土),東京大学で行われた「大学生研究セミナー2013」に参加した際,基調講演:安西祐一郎(独立行政法人日本学術振興会 理事長)「教育が日本をひらく——グローバル時代への提言——」を聴き,関心を持った。Problem-Based Learning の具体例として,複数企業と複数大学との産学協同による Future Skills Project 研究会とその取組が紹介された。その研究会によって各大学で講義科目が運営されているが,それは答えのない問題を企業が提示し,学生がチームで議論し応答するもので,学生の本気度が試される。大変示唆的であった。今回のフォーラムは,「社会で活躍できる人材育成」と「大学教育」を連結することに関して焦点が当てられ,いずれも主張が明確であり,かつ刺激的であり,参考になった。しかし,あまりにも「社会」ということが「企業」という文脈で語られすぎないように思われた。また,「主体性」も,「受動性と能動性」のコントラストやバランスの中で考える必要があるが,どちらかといえば「能動性」に重点を置いた議論のように思えた。「能動的に行動する」ためには,「受動的に観察,認識する」必要がある。「主体性」はかかる二者間のスパイラル・アップしたプロセスの性質であるように思われる。いずれにせよ,「社会」も「主体性」も,今一度根本的に再考する必要があるように思う。www.dentsu-ikueikai.or.jp/forum/2013.html を参照されたい。

な性質のものであり、「脱文脈」、つまり文脈から切り離されていることを、今一度確認しておくことが肝要であろう。「脱文脈」したものは、限りなくパッケージ化され、マニュアル化されるのが必定である<sup>32)</sup>。しかしながら、それは、現実の特殊具体的な状況とうまく接合できるであろうか。

ここで、汎用的な知識や技能や能力が何故必要とされているのかを、確認しておく必要がある。この点を説明することは、それほど簡単なことではない。いくつかの論点を語らなければならないが、ここでは、「雇用の流動化」ないし「労働市場の流動化」が進んでいる状況を前提に、それを確認したいと思う。実は、企業においてはこれを競争力の強化に活用したいという思いがあるであろう。それは、人件費の固定化を避け、かつ「必要な人材を、必要な時に臨機応変に採用できる」ならば、競争力を高め、柔軟な事業運営も可能になる。かかる採用の際、判断基準となるのが「汎用的な能力」をもっているかどうか、である。これは、採用時のみならず解雇の場合でも客観的な基準になり得る。またそれは、同時に、企業や組織に就職したり、転職したりできる能力でもある、と言い換えることが可能であろう。それ故に、企業は、人々がそのような能力、つまり「雇用可能性」(employability)をもっているかどうかを、正面から堂々と主張できる。今日の社会では、その能力は、個人責任で身に付けなければならない。雇用状況が悪化した状況においても、「雇用可能性」は個人の問題として、位置づけられる。

こうして、「システム [社会] の矛盾を個々人の人生において解決していく」<sup>33)</sup>「個人化社会」が進展していくことになる。「新しい教養」や「新しい能力」は、バウマンの言う、あらゆるものが軽くなり、移動を柔軟に成し得る「液状化する近代」において、提起されたと言ってよいと思われる。「液状化する現代」を「液状化する社会」と言い換えてもよいと思うが、彼は、そのような社会「であるいま、坩堝に投げ込まれ、溶かされかけているのは、集团的な事業や集团的な行動において、かつて、個人個人それぞれの選択を結んでいたつながりである——個人的生活と、集团的政治行動をつなぐ関係と絆である」、と述べている<sup>34)</sup>。中央教育審議会の答申では、「配慮」や「チームワーク」の必要性が述べられているが、それは、「流動化する近代ないし社会」を想定するならば、継続的なものではなく、仕事が続いている限りの、時間的に限定された限りのものであり、真に相互に配慮し合う絆を伴った継続的な「協働」ではないのではなかろうか。バウマンは、このような事態を現代の特徴の一つと捉え、先に述べたように、「液状化する社会」それ自体がリスク化し、それ故に「協働化社会」への期待が広がる状況において、「協働の芽」が踏みつぶされている、と判断し

32) かかる点や、「脱文脈化」についての問題点は、松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー——』ミネルヴァ書房、2010年、参照。とりわけ、第3章「<新しい能力>と教養——高等教育の質保証の中で——」が参考になる。

33) Bauman, *The Individualized Society*, Polity Press, 2001, p. 47. ジグムント・バウマン著、澤井敦/菅野博史/鈴木智之訳『個人化社会』青弓社、2008年、68頁。これは、ベックからの引用。

34) Bauman, *Liquid Modernity*, p. 6. 訳書、9頁。



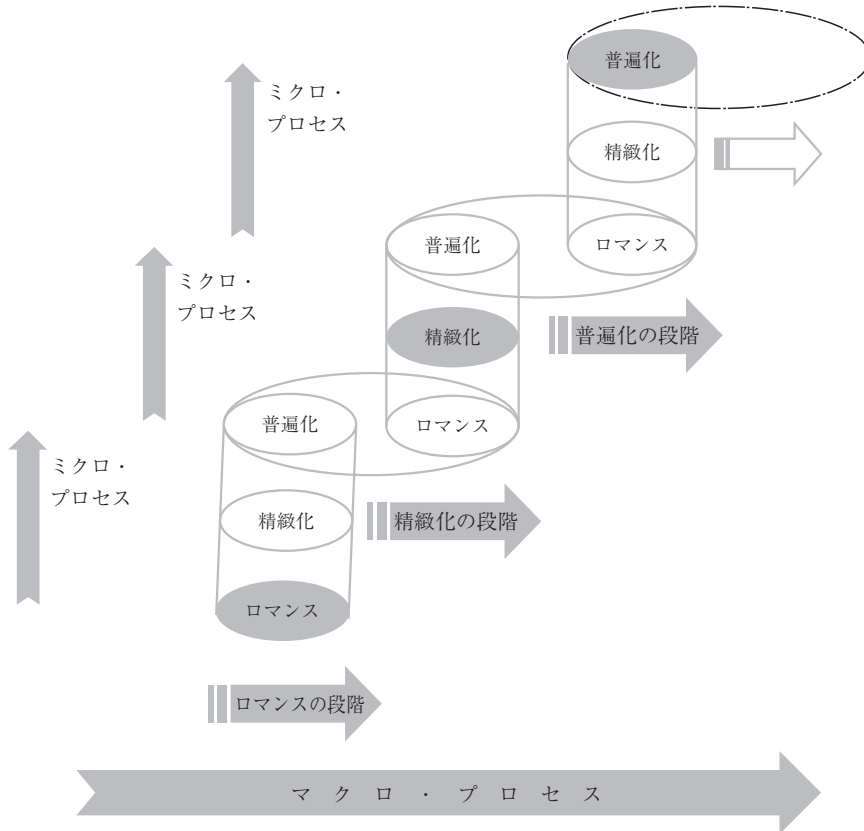
ているのである。そのような状況を前にして、我々は、単に「チームワーク」の必要性を述べることに止まるのではなく、さらに根本的に「新しい、広がりのある効果的な協働」を育てることへと洞察を進め、その可能性を拓いていかなければならないであろう。

答申では、たびたび「有為な人材の育成が重要」という根拠として「予測困難な時代であるから」という表現や、また「どんな社会になろうとも力を発揮できる人材を」という意味の発言が出てくるが、この点にはやや違和感を覚えざるを得ない。少なくとも、想像力を働かせるならば、現代社会は、これまで見てきたように、一方では「液状化する近代」、他方では「リスク社会」の状況を呈していることは、推測出来よう。答申では、先に見たように、明言はされていないが、暗に「液状化する近代」が前提とされているように推察される。しかし、それは、「隠されている」のであり、問題になっているわけではない。あるいは、ここでは、「個人化社会」を伴った「液状化する近代」を肯定的に、ないし「生の現実」として前提されている、と言うことも出来よう。「リスク社会」に関しては、ほとんど触れられていない。それも問題にしているとは、言えない。すでに言及したように、「液状化する近代」と「リスク社会」の相互影響関係のプロセスにおいて不可避的な「内省的近代化」への応答可能性を拓くことが、何よりも現代社会にとって焦眉の急である。それ故に、それらを文脈とした諸問題状況に適合的な能力育成の可能性を拓くことが、高等教育には必要になるのではなかろうか。

### 3. 新たな高等教育改革への基盤としての「目指すべき社会」への洞察

「社会において有為な人材」を育てることを考え、実践していくには、その「社会」を我々が生きていく「共通の世界」と捉え、その「世界への愛、配慮、気遣い」を基盤とし、そこから「世界への応答可能性を拓いていく」展望が欠かせないように思われる。つまり、我々が生きてきた「社会」の現実、その栄華と同時にその過酷さや問題性を受け止めた上で、未来を展望し、「今・ここに如何に生きるか」を共に問うことが、肝要になろう。より具体的に言うならば、以下のように言うことが出来る。まず、第一に、我々は「生きること」から「よく生きること」、さらに「よりよく生きること」を目指し、その戦略的行動として「工業化」、そして「高度工業化」を進展させてきた結果、「経済的に豊かな社会」を作り出すことが出来たけれども、次第に「液状化する社会」と共に「リスク社会」の状況も呈する事態となったこと、さらに前者は「個人化社会」を伴い、後者は「協働化社会」を必要とすることを、正面から真に受け止めることである。そして、それらは「生きること」から「よく生きること」、さらに「よりよく生きること」へのプロセスにどのように位置づけられ、どのような意味を持つかを問い、「内省的近代化」を共に生きていくことが、我々「死に向けて生きていく者」の共通の課題となるのではないであろうか。これこそ、「生涯教育」の必然性の根拠である。そこでは、その都度「真に価値ある」あるいは「目指すべき価値のある」社会とは何かが議論され、「仮説」として社会的モデルが案出され、その実現可能性が問われてし

第5図 教育のリズムとプロセス



出典：本図は、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが「教育のリズム」（1922年ロンドン師範学校協会での講演，久保田信行訳『ホワイトヘッド教育論』法政大学出版局，1972年，第二章，第三章）で述べていることを，筆者が図式化したものである。

かるべきである。このプロセスが教育，とりわけ高等教育にとって重要な「文脈」を提供するであろうし，また我々がかかるプロセスに適切な形で関与していく必要があると思われる。「教育」は「職業教育」に限定されるべきではなく，「生涯にわたる性質のもの」故に，「まさに生涯にわたって継続されるべきであり，とりわけ高等教育の一角を担う大学教育は「生涯教育」へのプラットフォームであるように思われる<sup>35)</sup>。ホワイトヘッドは，「教育全体が目指しているのは唯一の科目」であり，「それはいろいろな形であらわされてはいますが『生きるということ』」という，「この単一な統一体と結びつかないかぎり，……何の役にも立たない」と述べている<sup>36)</sup>。

彼は，この言説を「教育のリズムとプロセス」として，より体系的に，より具体的に展開

35) Cf., Bauman, “6 Learning to Walk on Quicksand”, *Liquid Life*. pp.117-128. 上掲訳書，「第6章 流砂の歩き方を学ぶ」，199-256頁，参照。

36) ホワイトヘッドが1922年ロンドン師範学校協会で行った講演「教育のリズム」での発言。久保田信行訳『ホワイトヘッド教育論』法政大学出版局，1972年，10頁。

している。第5図は、彼の言う「教育のリズムとプロセス」である。かかるプロセスは、マクロのプロセスとしての「ロマンの段階」, 「精緻化の段階」, 「普遍化の段階」から成るが、それらがミクロのプロセスの中に「入れ子型」に入り込み、スパイラル・アップした形で形成される。「ロマンの段階」は、「生の事実から出発して、いまだ捉えられていない個々の関係がいかなるものかについての認識へ」<sup>37)</sup>の過程であり、「幅広い意味のある可能性を明るみに出す」<sup>38)</sup>段階である。そこには、「その過程で生じる興奮」である「ロマンティックな感動」がある<sup>39)</sup>。それ故に、「ロマンの段階」では、「自由」が基調になる。「精緻化の段階」は、「ロマンスの段階での一般的な問題を、明確にし分析することによって、組織立った秩序のなかに新しい事実を発見する」<sup>40)</sup>過程であり、そこでは概念や分析方法の習得が中心をなし、「訓練」や「自己抑制」が必要となる。そして、「普遍化の段階」は、「秩序立てられた概念や適切な処理がなされた専門的知識」<sup>41)</sup>に基づく「普遍的な考え方から出発して、具体的な事例への適用を研究する」<sup>42)</sup>段階である。それは、また、その過程を通して得られた新たな「ロマンティックな感動」による「ロマンティシズムへの復帰」<sup>43)</sup>でもある。このような教育のプロセスには、ミクロとマクロの三つの段階の、また「自由」から「訓練及び自己抑制」へ、そして再び「自由」への三重の「繰り返し」があるけれども、「本質面では新しいものが常に付加される」が故に、「リズム」が生まれるのであり、ホワイトヘッドはこのような「知的成長のリズムなりその特性などへの注意を欠いた教育は不毛なものとなる」と注意を喚起している<sup>44)</sup>。ここで、「生きること」から「よく生きること」、さらに「よりよく生きる」プロセスと「教育のプロセス」が重なり合うことに、留意すべきであろう。そのことによって、真に「生きるということへと結びつける高等教育」の可能性が拓かれるように思われる。

次に、このような構想に沿い、「目指すべき価値ある社会」を一つの「仮説」として、提示してみたいと思う。もちろん、これは「仮説」である故に、その前提として「事実分析」がなされなければならないであろう。ここでは、「液状化する近代」や「リスク社会」を我々がこれまで生きてきた過去の「記憶」として考えられるならば、それらは広い意味で「事実」として捉えることが出来るように思われる。また、あらゆる「事実分析」も一定の「立場」からなされることも否定できない。ここでの仮説は、「世界への愛とプロセス哲学」の立場から展開した「事実分析」を基礎としている。

---

37) 上掲書, 29頁。

38) 上掲書, 31頁。

39) 上掲書, 29頁, 参照。

40) 上掲書, 31頁。

41) 同上。

42) 上掲書, 41頁。

43) 上掲書, 31頁。

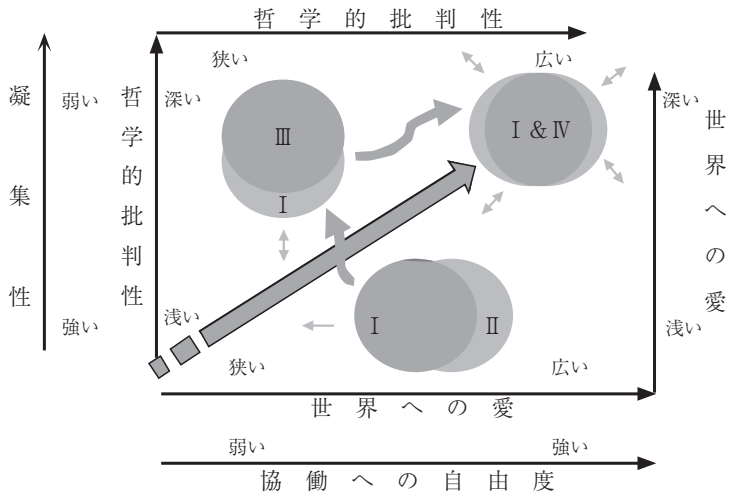
44) 上掲書, 第二章「教育のリズム」(25-45頁), 第三章「自由と訓練とのリズム的な要求」(46-65頁), 参照。



operative society) が分類されることになる。I は、第 3 図と第 4 図で示した「the social な状況」であり、生きるための「初原的な社会」である。II, III, IV は、これ自体では存在し得ない。それらは、純粹には第 4 図で示した「補完関係」を作り出す「機能性」である。II, III, IV を現実の社会形態として見るためには、I との補完関係を内包したものと、見なければならぬであろう。第 6 図は、このような補完関係を内包した三つの「社会形態」(「I & II」, 「I & III」, 「I & IV」) とその「社会的中心性」の歴史の変動を予測的に表現したものである。筆者は、「目指すべき価値ある社会」の仮説として、「I & IV」, 提示したいと思う。

「I & II」は、「福祉社会」での補完関係を示しているが、ある程度成功したことと同時に限界があることを示したものである。また、← は、その限界の故に補完関係は弱体化する方向にしか動かないことを示している。「I & III」の「個人化社会」は、III の I へではな

第 7 図 「世界への愛とプロセス哲学」を視座とする「中心的な社会形態」の発展



く I の III への補完関係に変質していく傾向が強いことを示しており、またそれは極めて抑圧的な性質を帯び、↑↓ は、I が III に吸収されるか、あるいは「警戒心」のため III から I が離脱する可能性もあることを示している。「I & IV」は、第 4 図で示したが、「市民的社会組織」の媒介などを通して「役割分担社会」が「市民的公共圏」を補完するようにその関係を再構築した社会である。また、そこでは、「市民的公共圏」に属する人々が「役割分担社会」において「役割」を担うことが「市民的公共圏」を補完する、あるいはサポートすることに繋がっているという確信が持てる社会である。そのような社会は、差異の相互承認の下での効果的な協働が進展すること、つまり「個性化」と「協働化」のスパイラル・プロセスの形成が漸進的に起動していく枠組みとなり得るであろう。

かかる社会について、今一度イメージを確かにするために参考となり得るものとして、「持続可能な発展のための世界経済人会議」(The World Business Council for Sustainable

Development: WBCSD) の環境ガバナンス (Environmental Governance) に関する三つのシナリオを紹介したい<sup>47)</sup>。第一のシナリオ: 「成長優先」 (First Raise Our Growth: FROG) は現状維持の立場であり、通常のビジネスシナリオ (business-as-usual scenarios) である。第二のシナリオは、「GEO ポリティー」 (GEOpolity) と呼ばれており、「市場を環境・社会目標に適合させることを政府に付託し、国際機構と国際条約の役割を非常に重視する」シナリオである。第三のシナリオは、「ジャズ」 (Jazz) と呼ばれる。「人々と企業が、文字どおりジャズのように、非集権的で、即興的な、筋書きのない、自主的なイニシアティブに満ちた世界を創出する」ことが目指されており、その「世界では、企業行動に関する情報が豊富にあり、世論と消費者の意思決定が企業によき行動を強く求める。政府は、規制よりも誘導・促進に力を入れ、環境団体と消費者団体は非常に活発に活動し、そして企業は正しい行動をとることに戦略的利益を見出す」ようになる。第7図の「I & IV」は、シンボリックには、第三の「ジャズ」シナリオである、と理解することが出来る。

しかし、「哲学的批判性」と「世界への愛」のベクトルとしての性質をもっていることから考えると、理想的かつ現実的であることを志向し得るであろう、第二の「GEO ポリティー」と第三の「ジャズ」の「協働」シナリオの融合が、「I & IV」に適合的であるように思われる。第7図の四方向の  $\leftrightarrow$  は、「市民的公共圏」と「役割分担社会」がコインの表と裏の固定的な関係ではなく、より柔軟で動的な表と裏の関係を示そうとしたものである。そこには、必ず「ズレ」が発生することを想定しておくことが必要であろう。このような「ズレ」は、おそらく「社会」の漸進的な発展の契機となろう。我々は、「21世紀を生きるための洞察」を得ようとするならば、かかる「ズレ」が漸進的な教育のための「文脈」を形成することに、より一層の注意を向けるべきであろう。

## V. 結言——21世紀における高等教育への洞察——

### 1. 教育と文脈

これまで検討してきた教育中央審議会の答申に「どのような社会になろうとも、生き抜く力を付ける教育」は、批判を媒介することなく、直観的に受容可能に思われる。しかしながら、よく考えてみるならば、これほど無責任なことはない。

答申においては、「どのような社会になろうとも、生き抜く力を付ける」ために、汎用的な「知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力」を養うと言うが、我々が「生きている」現実の社会状況などを文脈としないで、如何にして「知識や技能を活用し」、如何にして「複雑な事柄を問題として理解し」、如何に「答えのない問題に解を見出して

47) James Gustave Speth, "Why Business Needs Government Action on Climate Change", *WORLD · WATCH*, Vol. 18, No. 4, July/August 2005. ジェームズ・ギュスターブ・スペース「善良なる企業は気候変動に対処する政府のリーダーシップを求めている」『*WORLD · WATCH*』(日本版) Vol. 18, No. 4, ワールド ウォッチ ジャパン, 2005年8月。

くための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力」を養うのであろうか。また、さらに、「脱文脈」の状況で如何に、「人間としての自らの責務を」理解し、受容するのであろうか。それらが可能であるためには、なんらかの「文脈」を必要とする。

しかしながら、固定的で、一様な文脈を前提にするならば、世界を狭め、それ以外に対する視野を欠くこととなり、かかる文脈の下に想定された諸能力の育成は、結局「脱文脈化」とほぼ同じような結果をもたらすように思われる。中央教育審議会の答申には、「知識基盤社会」や「グローバル化」を文脈にしているけれども、それらは「雇用可能性」の文脈に収斂化されているように思われる。佐藤 学は、21世紀に必要とする「四つの教育観」として、「知識基盤社会」、「多文化共生社会」、「格差やリスク社会への対応」、「シチズン・シップ」などを指摘しているが<sup>48)</sup>、むしろそれは、ここで言う「文脈」といってよい。とりわけ、高等教育には、このような幅広い文脈が欠かせないように思われる。

## 2. 「世界への愛」の基盤性と高等教育の可能性

そのためには、「どのような社会になろうとも」ではなく、我々の「生きている世界」を通時的プロセスである「過去」と「未来」を接合する共時的プロセスの下に捉え、「どのような社会が価値ある社会か」を想像力をも動員して考え、共有化する営みを文脈とすることから、スタートすべきであろう。

そこにおいては、「世界への愛」が基盤を成す。「世界への愛」とは、我々が生きる「共同社会」と自然や人工的なものも含む「事物世界」が織りなす世界への、過去と未来に対する現在の我々の「眼差し」である。本稿では、「世界への愛とプロセス哲学」の立場から、かかる「生きている世界」を「液状化する近代」、「リスク社会」、「内省的近代化」によって言い表し、「目指すべき価値ある社会」として「個性化と協働化の相互媒介な社会」を展望し、それらの高等教育における文脈化の必要性を、不十分ながら説いてきた。

そのような下でのラーニングが、高等教育には求められなければならない。また、そこから知識の活用に方向性を与える英知が培われる、との確信を持つ必要がある。ホワイトヘッドは、「英知」を「知識を御し、適切な結果をもたらすために選ぶ道を示し、われわれの身近な経験に価値づけをしてくれるもの」と捉えている<sup>49)</sup>。まさに、「英知」は、「ナレッジ・ガバナンス」なのである。それは、「生きること」のプロセスに結び付けられていることによって、また「ライフ・ガバナンス」でもある。前者と後者が漸進的にスパイラル・アップする契機となることによって、「教育のプロセス」と「生きるプロセス」が融合することになるであろうし、またそうならなければならない。

48) 佐藤学稿「教育の現在、そして未来に向けて」『現代思想』青土社、第37巻第4号2009年4月、72-81頁、参照。

49) ホワイトヘッド、『ホワイトヘッド教育論』、47頁。

### 3. 高等教育の課題

そのような可能性を拓くためには、ホワイトヘッドに導かれながら、「教育のリズムとプロセス」に配慮した高等教育改革が必要である、と結論付けることが出来る。教育のプロセス、つまり「ロマンの段階」、「精緻化の段階」、「普遍化の段階」には、「ミクロとマクロの三つの段階の、また『自由』から『訓練及び自己抑制』へ、そして再び『自由』への三重の『繰り返し』があるけれども、『本質面では新しいものが常に付加される』が故に、『リズム』が生まれるのである。我々は、かかるプロセスやリズム、ならびにそれらの特性に注意深く配慮し、それらに適合的な形で、教育の体系、教育内容、教育方法、学習形態を再設計する必要がある。

このような再設計に当たっては、教育のプロセスにおけるマクロの最後の段階、つまり「普遍化の段階」が高等教育に当たることは、言うまでもないが、その後のプロセスを忘れてはならない。それは、生涯教育の段階と考えることが出来る。高等教育、とりわけ大学教育は、生涯教育へと出発するための、またそこから立ち戻ってくるための「プラットホーム」でもある、という視点が大事である。かかる視点も織り込み、さらに「ロマンの段階」、「精緻化の段階」、「普遍化の段階」に応じて、文脈や諸問題の濃淡、範囲、焦点の置き所が変化することに留意しながら、高等教育改革を再設計すべきであろう。本稿においては、これらについて、具体的に踏み込むことが出来なかった。今後の課題となる。

再度強調するが、「教育にとっての文脈」、「教育のリズムとプロセス」の特性は、重要である。これらへの無関心や「取り違え」は、大きな混乱や弊害が発生する可能性が高まるように思われる。それ故に、最後に以下の点を指摘し、本稿を閉じたいと思う。今日注目を浴びている「アクティブ・ラーニング」や「PBL」は、大変重要な教育方法である。しかしながら、それらの構想・実践の際、それらはいくまで「方法」にすぎないという点はもちろんのこと、さらにはそれらを「教育のプロセス」のどの段階に位置づけるのかを明確に意識すべきであろう。位置づけによって、「内容」が異なってくるからである。また、どこに位置づけようと、もちろん「ロマンの段階」と「普遍化の段階」がより多くなると思われるが、その前後の段階での内容を前提したり、用意したり、あるいは想定したりすることによって、リズムを作る、ことが肝要であろう。今日実践されている「アクティブ・ラーニング」や「PBL」は、そのことに配慮出来ているのか否か。「リキッド・ラーニング」(Liquid Learning: バウマンの表現に倣った造語であるが)を避けるためには、かような配慮は欠かせないように思われる。

(完)

(2014年11月25日受理)



## Problems in Modern Society and Insight into The Higher Education Reform

TANIGUCHI Teruso

This paper considers the “Amor Mundi and Process Philosophy”, as its context, critically reviews the higher education reform that has suddenly sped up over the past 20 years, and takes account of the possibilities and challenges to higher education as an insight into living in the 21st century.

The education reform has been made in view of international situations and today’s social trends, aimed, conceived and implemented at developing human resources to fit into it, especially cultivating a “zest for living”. I do not have any objection to the education reform, if it is related to compatibility toward social trends and life. The problems are how and from what position they understand “social” and “life”, which are the foundations of the reform. Also, what does insight into the future mean for them? Regarding these points, I currently do not think that the contents of the reform are insufficient to obtain a broad understanding. In the report regarding the reform, “difficult times to predict” is cited as the reason why development of effective human resources is important. And, the report emphasizes that human resources that can fully provide their ability are necessary in any society. I feel there is something wrong with this expression.

If we are considering and implementing the development of promising talent in society, the expression, “in any society” is not suitable. We should start from understanding the world where we are living using a synchronic process, which connects two diachronic processes, “past” and “future”, imagining what kind of society would be ideal, and encouraging acts of sharing. In other words, it is essential that we accept the reality, not only the glory of society, but also its rigors and problems, while we view the future and ask “how and why we live here now”. Here, “Amor Mundi” is the foundation. The “Amor Mundi” relates to our current views toward the past and future of our communities and the world woven by “things” including natural and artificial things. Such questioning processes based on this would be able to provide important “contexts” for education, especially higher education. By that, “education that is related to life” is really directed. Now is the time we need to reconsider this seriously.

From the standpoint of “Amor Mundi and Process Philosophy,” the world where we are living is expressed as a “liquid modernity”, “risk society” and “reflexive modernization”, and a mutually mediated society of individualization and cooperation. This is viewed as a valuable society which should be aimed for. In this paper, I have explained the necessity of contextualization in higher education.

Also, in this paper, for the realization of “education related to life”, the “rhythm and process of

education”, which philosopher A. N. Whitehead emphasized, is focused on and its importance is pointed out. According to him, the education process consists of macro processes, such as the “stage of romance”, “stage of precision”, and “stage of generalization”. Three other micro processes are embedded in each macro stage. There is a rhythmic transition from freedom to “training and self-discipline” and to freedom again. The last step of the macro process is higher education, however it must be noted that there is a subsequent process. It is the stage of lifelong education. It is important to view higher education, especially university education as a starting point to lifelong education, and is also a “platform” that can be returned to. In this paper, taking the above viewpoints into consideration, I pointed out the necessity of redesigning the higher education reform according to the “stage of romance”, “stage of precision”, and “stage of generalization”, while paying attention to the contexts and change in density, range and focus of problems. However, I was not able to closely examine these matters. It is challenge for my future.